



# 教職大学院

# Newsletter No. 86

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2016.6.25

## 実践し省察するコミュニティ

### 実践研究 福井ラウンドテーブル

### 2016 Summer Sessions 特集号

# 実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:  
Summer Sessions 2016  
for Reflective Practice  
and Organizational Learning  
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル

2016 Summer Sessions

6/24(fri) 17:30-18:40

6/25(sat) 10:00-17:40

6/26(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V (教育系1号館)  
/AOSSA

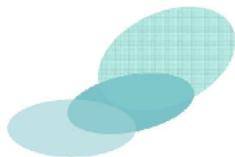
探究する学びを実現する教師  
教師を支える教職大学院  
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/  
実践と研究を結ぶ  
新しい実践研究組織とそのネットワーク

## 2016.6.24-26

教師教育改革コラボレーション/福井大学教職大学院

大学院教育学研究科教職開発専攻  
共催 福井大学高等教育推進センター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム  
後援 福井県教育委員会



## 内容

ラウンドテーブルによるこそ (2)

実践し省察するコミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル

2016 Summer Sessions 内容と構成・会場図 (3)  
ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える (13)

分散型コミュニティへの挑戦

ラウンドテーブルの広がり と 深化 (15)

ラウンドテーブルの歩み (16)

教職大学院 Newsletter No.11 より (18)

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009

教職大学院 Newsletter No.84 より (22)

実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Spring Sessions

ラウンドテーブル写真集 (27)

キャンパスマップ (28)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2016年6月の開催をもって31回を迎えます。今回のラウンドテーブルも多様な実践と省察との出会いに満ちています。初日のプレセッションに始まり、学校（Zone A）・教師（Zone B）・コミュニティ（Zone C）・授業（Zone D）の各領域に分かれたセッションを展開する2日目、そして最終日のクロスセッションでの語り合い・聴き合いへと続きます。今回あらたにZone Bでは、B2として「これからの学部段階の教員養成を考えるー実践を聴き、夢を語るー」が展開します。また、前回より始まった児童生徒たちによるポスター発表も引き続き開催します。この3日間のラウンドテーブルが、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることに、スタッフ一同大きな期待を持っています。

## ラウンドテーブルによるこそ

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻長 柳澤 昌一

実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions に参加いただき、ありがとうございます。

16年の年、31回の積み重ねの中でつねに展開し続けているラウンドテーブルですが、大切にしていること、願っていることは変わりません。実践の長い歩み、そのプロセスをじっくり語り、聴き合い、互いに問い深める時間と空間を生み出したいということです。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

それぞれの分野では、固有の技術や言葉や型を彫琢していますが、実践のプロセス、それを通じた実践者としての学習と成長の道筋に関心をもって聞けば、そこには分野を超えて共有できる、されるべき実践の中での知とその成長のストーリーが紡がれていることに気がきます。そして、そこで捉え返され共有される長い実践展開のストーリーが、次の自他の実践の展開を支えるフレームとして生きて働いていくことを実感してきています。その時ラウンドテーブルは、一過性の集会ではなく、それぞれの実践のコミュニティでの営みとその意味を問い返し、その持続と発展を支える省察的なコミュニケーションのためのメタコミュニティとして働き続けていることとなります。

こうした省察的なコミュニケーションとそのコミュニティを通して、地域を越え分野を超え、しかもそれぞれの分野の実践の長い展開に根ざした協働探究の可能性がひらかれるならば、それぞれの実践の蓄積と多様性を活かしたパブリックなコミュニケーションを編んでいく可能性につながっていくのではないかと。それは公教育(Public Learning)とその理念への問いと、それぞれの持ち場での日々の実践との見失われた環を問い直す、編み直すプロセスにもつながっています。その問いは、教育学部・教職大学院の存在する根本的な理由に根ざしています。

プレセッションから多様なサイクルの積み重ねを通して、互いの実践の展開を跡づけ、意味を共有し、次の展開へと視界をひらいていく3日間にできたらと思います。

語り手以上に聴き手の力が問われるラウンドテーブルです。今回もまたセッションを通してプロセスを追う力を培っていきたいと思っています。どうかよろしくお願い致します。

## 実践研究 福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions

6/24(fri)

Pre-session 17:30-18:40

教職大学院におけるプロセスコンサルテーション

6/25(sat) 10:00-17:40

Students' Poster Session 10:00-11:20

子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来』

*orientation* 13:00-13:10 学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

- A 学校:子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ チームで「育ち」を支える
- B 教師 ①21世紀の教師教育をイノベーションする 学校を刷新するマネジメントリーダーの資質能力を考える  
②これからの学部段階の教員養成を考える:実践を聴き、夢を語る
- C コミュニティ: ①学び合うコミュニティを培う:若い世代と地域を結ぶ(会場は福井駅前 AOSSA)  
②地域と学校はいかに学び合うのか:大人も子どもも育ち合うコミュニティへ
- D 授業研究:教師の資本を授業研究によっていかに培うのか:子どもと教師の学びを支えるために

*session I* 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う **knowledge fair**

*session II* 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る **symposiums**

*session III* 16:00-17:40 テーマ別の話し合い 問いを深める **forums**

6/26(sun) 8:20-14:00 *Session IV* Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告 I 9:00-10:40 ④報告 II 10:40-11:40 ⑤報告 III 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 申込は上記ホームページから申込書式をダウンロードし、必要事項をご記入の上、メールで送っていただく形で行います。受付期間は5月17日から6月17日を予定しています。
- 6/26の*session IV*の実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。  
6/26の*session IV*の参加についてのお願い=午前午後全日程(8:20-14:00)の参加をお願いします。
- ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため8:20-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として8:20-14:00の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いたします。  
プログラムの変更等があり得ます。最新の情報を福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご確認ください。

Session I ポスターセッション 発表タイムテーブル 【13:10-14:10】

① 13:10-13:25

| 1階ホール              | 2階ホール            |
|--------------------|------------------|
| 奈良女子大学附属中等教育学校     | 福井大学教育学部附属特別支援学校 |
| 福井大学教育学部附属中学校      | 越前市花筐公民館         |
| 福井大学ライフパートナー事業     | /                |
| 福井市越廼公民館           |                  |
| 福井大学探求ネットワーク(紙すき)  |                  |
| 福井大学探求ネットワーク(まちかど) |                  |
| 福井大学探求ネットワーク(人形劇)  |                  |

② 13:30-13:45

| 1階ホール            | 2階ホール             |
|------------------|-------------------|
| 福井大学教育地域科学部附属小学校 | 東京都板橋区立赤塚第二中学校    |
| 福井大学 ライフパートナー事業  | 新潟大学              |
| 福井市清水東公民館        | 福井大学探求ネットワーク(FFC) |
| 福井市足羽公民館         | 福井大学探求ネットワーク(探検)  |
| 福井大学探求ネットワーク事業   | 福井大学探求ネットワーク(工房)  |
| 福井大学探求ネットワーク(理科) | /                 |

③ 13:50-14:05

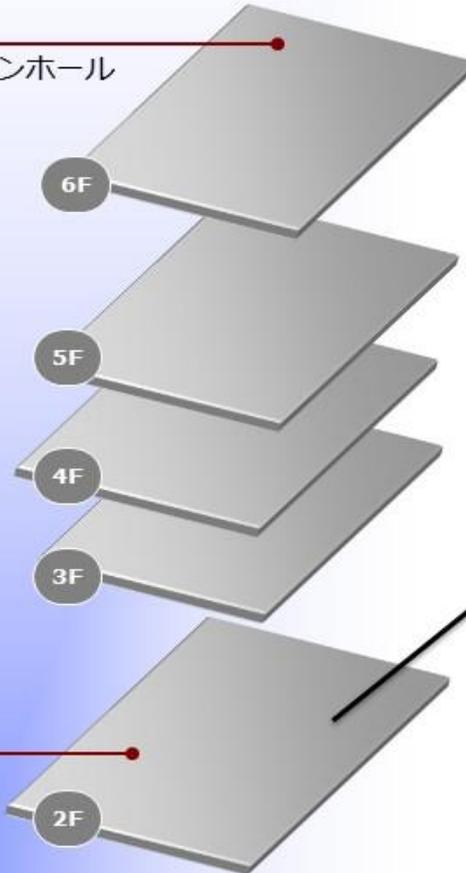
| 1階ホール                | 2階ホール         |
|----------------------|---------------|
| 奈良女子大学附属中等教育学校       | 福井大学教育学部附属幼稚園 |
| 鯖江市立豊小学校(現 越前市国高小学校) | 福井市一乗公民館      |
| 福井大学 CST             | /             |
| 福井市円山公民館             |               |
| 福井大学探求ネットワーク(もぐもぐ)   |               |
| 財務省主計局               |               |

実践し  
省察する  
コミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions  
2016.6.24(fri) - 26(sun)

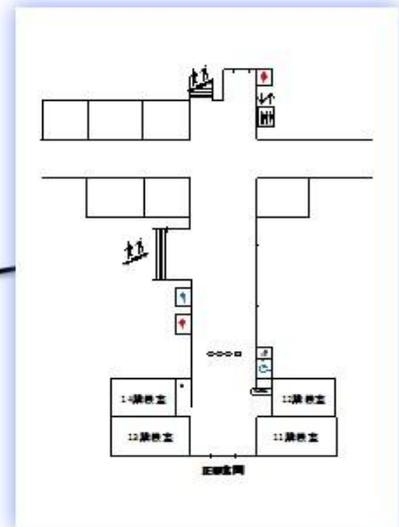
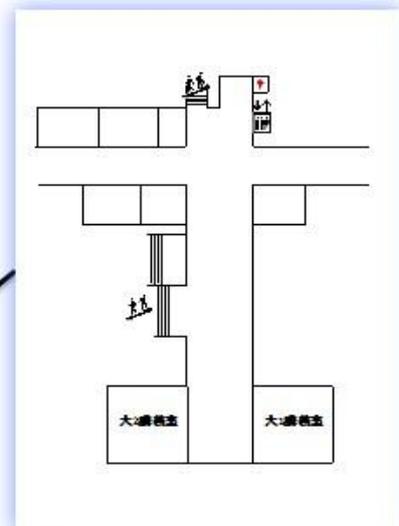
## 教育系 1号館

**6F**  
コラボレーションホール



**2F**  
大1講義室  
大2講義室  
203~207

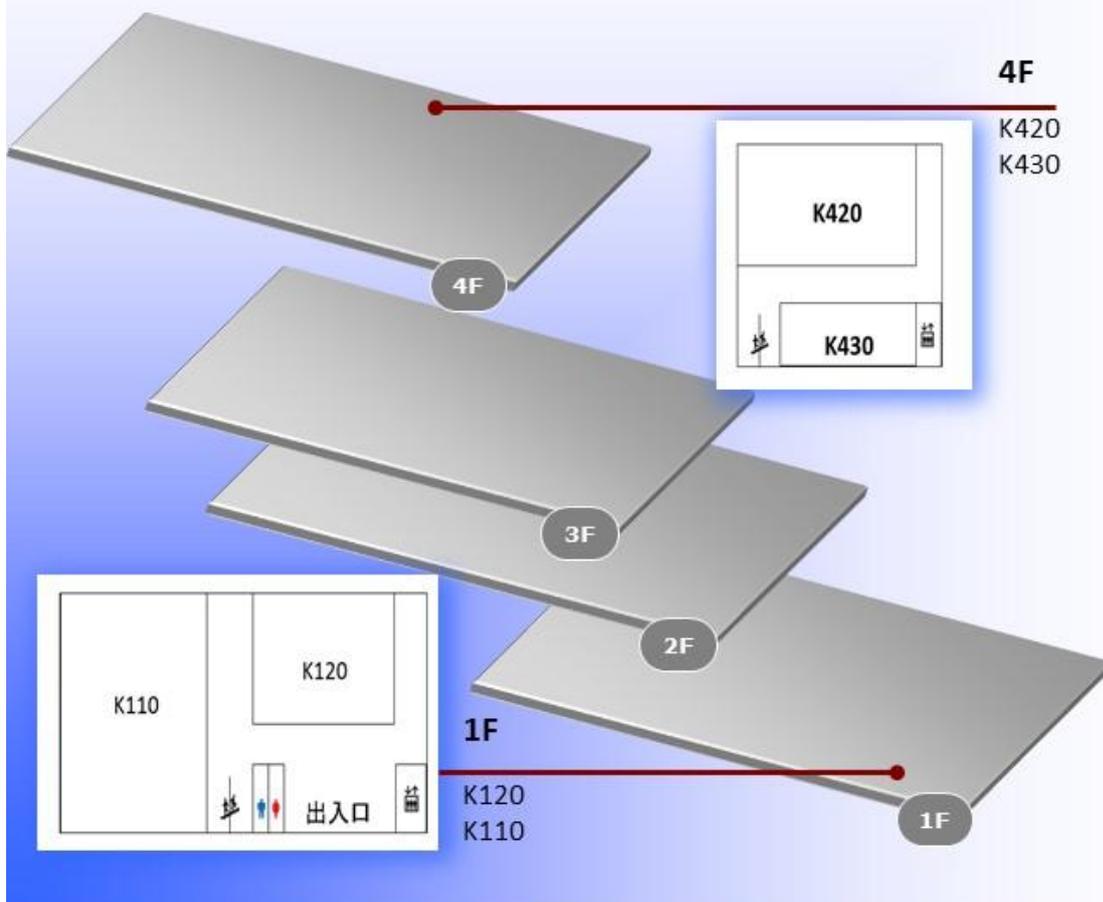
**1F**  
受付  
11講義室  
12講義室  
13講義室  
14講義室



## 共用講義棟

実践する  
省察する  
コミュニティ

実践研究 福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions  
2016.6.24(fri) - 26(sun)



# Zone A 学校

## 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

### ーチームで「育ち」を支えるー

教師集団がコミュニティとなって協働することの重要性は、「チーム学校」といった言葉に端的に見られるように、もはや周知のものとなっています。コミュニティやチーム、あるいは協働の重要性が認識されるようになってきたのは、取りも直さず、大きく変動する21世紀の社会を生きる子どもたちに、私たちのこれまでの価値観や経験をそのまま教えられないことが明確になってきたからです。そのような教育を求められる今の学校現場では、教師一人の力で全てに対応することに限界があります。だからこそ、私たちは他者とチームになることによって可能性を拓いてきました。これまで「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」というテーマのもと Zone A が積み重ねてきたセッションでも、そのことが繰り返し確認されてきました。

協働的な実践を積み重ねてきた方々であれば、チームで取り組むことのできる確かな有効性や実り豊かな可能性を実感しているのではないのでしょうか。しかし、たとえチームを組織したとしても、その活動がこれまでの学校教育の枠組みを脱しないとするならば、これからの社会を生きる子どもたちに資するものにはならないかもしれません。一方で、しばしば理念ばかりが先行し、意義は分かるが多忙な現実の中で具体的にはどうすれば良いのかと抵抗感にも似た気持ちを抱いている方々が多いのも現実だと思えます。

こうした問題意識のもと、私たちは今回、フラクタルな構造としての「育ち」というキーワードに着目することにしました。これからの社会を生きる子どもたちを支えるという視点から考えるならば、子どもたちの「育ち」だけではなく、そこには、私たち教師の、あるいは学校の、さらには地域や社会全体の、そしてチームそのものの「育ち」の問い直しもまた同時に浮かび上がってくるからです。そこで今回 Zone A では「チームで『育ち』を支える」というサブテーマを設定し、学校現場で実践をされている方々の発表や、参加者の皆様との語り合いを通して、チームでのアプローチについて具体的に考えていくことにしました。本セッションを通し、これからの学校教育全体に対する教師コミュニティの可能性について、皆さんと深め合うことができると考えています。

**Orientation 13:00-13:10** 総合研究棟V（教育系1号館）1階11講義室

**Session I 13:10-14:10 poster session** 総合研究棟V（教育系1号館）1・2階ホール

**Session II 14:20-15:50 symposium** 共用講義棟1階 K120

〈シンポジスト〉

|                   |         |
|-------------------|---------|
| 福井市啓蒙小学校長         | 川崎 清美 氏 |
| 板橋区立赤塚第二中学校教諭     | 岡部 誠 氏  |
| 福島県立ふたば未来学園高等学校教諭 | 對馬 俊晴 氏 |

〈コーディネーター〉

福井大学教職大学院准教授  
（福井大学教育学部附属幼稚園主幹教諭） 青木 美恵 氏

**Session III 16:00-17:40 forum** 共用講義棟1階 K120

# Zone B 教師

## 21世紀の教師教育をイノベーションする

Zone B では、生涯にわたる教師の職能成長を支える教師教育という視点から、“21世紀の教師教育をイノベーションする”をテーマとしています。

### B1 学校を刷新するマネジメントリーダーの資質能力を問う

現在、教育改革の大きな展開の中で、学校の組織文化を踏まえつつ、改革への長く広い展望を持ち、長期的な学校改革への広汎な協働を生み出し支えていく、新しいスクールリーダーシップが求められています。

このことを踏まえ、福井大学教職大学院では、今年度から管理職になることを前提に入学する「学校改革マネジメントコース」を立ち上げました。本学教職大学院の特徴である「学校拠点方式」により、学校ごとの抱えるマネジメント課題について、学校改革のヴィジョン、改革を進める組織づくり、改革に伴う危機管理に注意をむけつつ、改革期の組織マネジメントという課題を焦点とする、新しいコースです。

昨年12月に中央教育審議会から出された答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」においても、教職大学院において、従来のミドルリーダーの養成とともに、教育委員会のニーズに合わせて、管理職候補者となる教員に対する学校マネジメントに係る学修の充実を図り、管理職コースを設置することや、教育委員会との連携による管理職研修を開発・実施することの必要性が謳われています。

そこで、今回の Zone B では、「学校を刷新するマネジメントリーダーの資質能力を問う」と題し、これからの組織マネジメントの在り方やマネジメントリーダーに求められるもの、またその養成などについて、福井大学教職大学院の取り組み、教員養成系大学における教師教育改革とマネジメント、文部科学省の考える管理職コースの姿、報道関係者から見るマネジメントと学校の課題などから、関係のシンポジスト4名で論議していただくとともに、引き続いて行われるフォーラムでは、少人数のグループで参会者の皆様方と共に論議していきたいと思えます。

**Orientation 13:00-13:10** 総合研究棟V（教育系1号館）2階 大1講義室

**Session I 13:10-14:10 poster session** 総合研究棟V（教育系1号館）1・2階ホール

**Session II 14:20-15:50 symposium** 総合研究棟V（教育系1号館）2階 大1講義室

〈シンポジスト〉

独立行政法人 国立高等専門学校機構監事  
・前兵庫教育大学学長

加治佐 哲也 氏

文部科学省高等教育局  
大学振興課教員養成企画室長

柳澤 好治 氏

福井新聞社論説委員長  
福井大学教職大学院教授

遠藤 富美夫 氏

三田村 彰 氏

〈コーディネーター〉 福井大学教職大学院教授

倉見 昇一 氏

**Session III 16:00-17:40 forum** 総合研究棟V（教育系1号館）2階 大1講義室および203, 204, 205, 206 講義室

Session I, II を受け、小グループに分かれて参会者の皆様方と議論を進めます。

## B2 これからの学部段階の教員養成を考える –実践を聴き、夢を語る–

教員養成をめぐる制度の見直しへの提起が重ねられ、とりわけ教職免許制度の改定が迫ってきています。しかし、長い蓄積の中で培われてきた組織の中で、新しい課題への取り組みを進めていくことには大きな困難がともないます。それぞれの実践と経験を活かした、当事者としての知恵が問われてきていると思います。

今回、学部において教員養成に携わる当事者が、互いの取り組みを聴き合い、語り合う新しいセッションをひらいていくことになりました。大学における教員養成をどのように支え、また今後に向けて発展させていくのか。さまざまな背景と専門を持ち、学部での教員養成に携わっている当事者同士、現実の中で互いの取り組みを聴き合い、語り合う場を創っていきたいと思います。

初回となる今回は、少人数で多様なメンバーが大学を超えて教員養成の取り組みを聴き合うことを中心に据えたいと思います。それぞれの取り組み、そこでの工夫、あるいは課題や悩みも含めて共有し学び合いながら、これからの学部における教員養成への夢を、当事者としてふくらませていくことができればと思います。

互いの現実とそこでの取り組みを聴き合うことを通して、また夢を語ることを通して、さまざまなキーワードがセッションの中で浮かび上がってくる。それを次回のセッションにつないでいきたいと思っています。

**Orientation 13:00-13:10** 総合研究棟V（教育系1号館）6階 コラボレーションホール

**Session I 13:10-14:10 poster session** 総合研究棟V（教育系1号館）1・2階ホール

**Session II – III 14:20-17:40 forum** 総合研究棟V（教育系1号館）6階 コラボレーションホール

〈報告者〉

|  |   |                         |
|--|---|-------------------------|
| 東京家政大学 結城 孝雄 氏   | ／ | 金沢大学 村井 淳志 氏            |
| 鳴門教育大学 山田 芳明 氏   | ／ | 静岡大学 江口 尚純 氏 , 渋江 かさね 氏 |
| 長崎大学 藤井 佑介 氏   | ／ | 玉川大学 石井 恭子 氏            |
| 仁愛大学 西出 和彦 氏   | ／ | 神奈川大学 入江 直子 氏           |
| 福井大学 石井バークマン麻子 氏 , 浅原 雅浩 氏 , Hartmann Elizabeth Sugino 氏 |   | 他                       |

# Zone C コミュニティ

## 学び合うコミュニティを培う –持続可能なコミュニティをコーディネートする–

これまで Zone C では、各地で取り組まれている長期に渡る実践の歩みとその展開を、地域・世代・領域を超え共有し検討し続けています。そして、ここ数年はコミュニティの発展における「持続性」をめぐる問題に焦点を当て、互いの実践から学び合っています。現在、私たちが地域や職場で出会う課題はある一つのアプローチで解決しえないものへとより複雑化・高度化しています。そのため、地域の発展を支える自治や学習においてもその持続的な展開をどのようにコーディネートしていくかがこれまで以上に問われていると言えます。この問題意識と視点を引き継ぎながら、Zone C は、前回の互いに重なり合う二つのテーマ C1「若者と地域」・C2「地域と学校」をさらに問い深めていきます。

人口減少・移動の更なる進行によって、地域社会の存立そのものが危ぶまれるとともに、「地方創生」が重点課題としてクローズ・アップされてきました。そのような中、C1 では、あらためて新しい世代の主体的な実践や地域活動に光をあてながら、その持続的な展開を支えるコーディネートの可能性と課題を考えていきたいと思えます。

また、昨年 12 月には「学校と地域の連携・協働」にかかわる課題整理と今後の包括的な方向性を提起する中央教育審議会答申が出されましたが、子どもたちの学びや成長を支えることで学校と地域がともに学び合うという実践は、各地で着実に積み重ねられてきています。C2 では、そのような実践の長い歩みや新しい試みを交流し、その価値を互いにじっくりとふり返りながら、子どもも大人も育ち合うコミュニティのこれからを考えていきたいと思えます。

## C1 学び合うコミュニティを培う –若い世代と地域を結ぶ– (会場:AOSSA)

C1は、福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下、JR福井駅東口前のAOSSAが会場です。Session I ではフロアをまたぐ空間的な拡がりのなかにポスターを配置し実践交流を行います。Session II では、「持続可能なコミュニティをコーディネートする–若い世代と地域を結ぶ–」と題しシンポジウムを行います。若い世代が主体的に活動を進め地域に参画していることの意味を確認しながら、新しい世代の活動をどのように支えていけるのか、また、それをどのようにコーディネートしていけるのかを各地の取り組み事例をもとに考えていきます。Session III では、シンポジウムの問題提起を受け、6人程度の小グループを組み互いの取り組みを交流・共有していくクロスセッションを行います。多くの皆様のご参加・ご来場を心よりお待ちしております。

**Orientation 13:00-13:10** AOSSA 6階 (参加受付ブースあり)

**Session I 13:10-14:10 poster session** AOSSA 4階展示スペース

**Session II 14:20-15:50 symposium** AOSSA 6階レクA・B

「持続可能なコミュニティをコーディネートする  
–若い世代と地域を結ぶ–」

〈シンポジスト〉

|                   |         |
|-------------------|---------|
| 一般社団法人みやぎ連携復興センター | 高橋 若菜 氏 |
| さこう工務店 店長         | 児川 朋香 氏 |

〈コーディネーター〉

|               |         |
|---------------|---------|
| 福井市教育委員会生涯学習室 | 齋藤 法之 氏 |
| 福井大学教職大学院特命助教 | 半原 芳子 氏 |

**Session III 16:00-17:40 forum** AOSSA 6階レクA・B



## C2 地域と学校はいかに学び合うのか —大人も子どもも育ち合うコミュニティへ—

(会場:福井大学文京キャンパス)

Session I では、同キャンパスで展開されているZone A「学校」、Zone B「教師」、Zone D「授業研究」とともにポスターにて実践交流を行います。Session II では、「地域と学校はいかに学び合うのか—大人も子どもも育ち合うコミュニティへ」と題しシンポジウムを行います。学校と地域のかかわりを捉え直そうとしている活動や、地域に暮らす大人たちと子どもたちとの結びつきを編み直す各地の取り組み事例をもとにテーマを問い進めていきます。Session III では、シンポジウムの問題提起を受け、6人程度の小グループを組み互いの取り組みを交流・共有していくクロスセッションを行います。多くの皆様のご参加・ご来場を心よりお待ちしております。

Orientation 13:00-13:10 総合研究棟V (教育系1号館) 1階 13講義室

Session I 13:10-14:10 poster session 総合研究棟V (教育系1号館) 1・2階ホール

Session II 14:20-15:50 symposium 共用講義棟4階 K420

「地域と学校はいかに学び合うのか—大人も子どもも育ち合うコミュニティへ」

(シンポジスト)

|                  |         |
|------------------|---------|
| 上田市教育委員会青少年育成指導員 | 伴 美佐子 氏 |
| 福井市越廼小学校教諭       | 川崎 耕介 氏 |
| 福井市越廼公民館主事       | 小畑 幸子 氏 |

(コーディネーター)

|              |        |
|--------------|--------|
| 福井大学教職大学院准教授 | 宮下 哲 氏 |
|--------------|--------|

Session III 16:00-17:40 forum 共用講義棟4階 K420

# Zone D 授業

## 教師の資本を授業研究によっていかに培うのか

### －子どもと教師の学びを支えるために－

教師が専門職として生涯にわたって学び続け、成長し続け、新しい時代の授業づくりへの意欲を高め維持していくために、そして、未来を築いていく子どもたちの学びと成長を支えるために、日本独自の学校文化・教師文化である授業研究に大きな期待が寄せられています。しかし、ただ授業研究を実施すれば教師の指導力や授業づくりへの意欲が向上するわけでもなく、また、子どもたちの学力や生活力が向上するわけでもありません。何のために授業研究を実施するのか、いかなる授業研究を実施するのか、どのように授業研究を実施するのか、私たちはこれらの問いを常にもちながら、確かな戦略をもって授業研究を実施することが必要になります。

Zone Dでは前回に引き続き、「専門職の資本」※という考え方に基づいた「教師の資本を授業研究によっていかに培うのか」というテーマで各Sessionを進めていきます。未来を築いていく子どもたちの学びと成長を支えている実践者や研究者の方々、「専門職の資本」を磨きはじめた若い実践者の方々にご参会いただければと思います。

※「専門職の資本」は人的資本、社会関係資本、意思決定資本の3つからなり、これらは、教師が専門職として生涯にわたって学び続け、成長し続けていくために投資できる（磨いていける）ものです。Zone Dでは、授業研究の力を「専門職の資本」へ投資するという観点から、参会者の皆様と一緒に考えていきたいと思えます。

**Orientation 13:00-13:10** 総合研究棟V（教育系1号館）2階 大2講義室

**Session I 13:10-14:10 poster session** 総合研究棟V（教育系1号館）1・2階ホール

**Session II 14:20-15:50 symposium** 総合研究棟V（教育系1号館）2階 大2講義室

「子どもと教師の学びを支える福井の授業研究 PART 2」

〈シンポジスト〉

高浜町立青郷小学校教諭 砂原 亘 氏  
福井県立丹生高等学校教諭 小川 駿也 氏

〈コメンテーター〉

福井大学教育学部附属中学校副校長 牧田 秀昭 氏

〈コーディネーター〉

福井大学教職大学院准教授 木村 優 氏

**Session III 16:00-17:40 forum** 総合研究棟V（教育系1号館）

1階 11, 12, 13, 14講義室 および 2階 大2講義室

「子どもと教師の学びを支える授業研究の実践」

- A. 学校における授業研究の多様性から学び合う  
長崎市立西浦上小学校教諭 野口 将信 氏
- B. 協働連携による授業研究  
勝山市立野向小学校教諭 山田 啓子 氏
- C. 高校における授業研究の発展  
福井県立高志高等学校教諭 西 繁寿 氏

## ラウンドテーブル 実践し省察するコミュニティを結び支える

2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフストーリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にいるものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かせるような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備しえていな

い。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじ

めて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実はある。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がりや確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ①実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ②そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1報告60-100分)
- ③実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6名程度)
- ④グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社

会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)

⑤小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないかと。語り合う34の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして20名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの9年の展開を振り返りながら、そう考えはじめています。  
(柳沢 昌一『教職大学院ニュースレター』No.11 ,2009.3.31)

## ラウンドテーブルの4重の意味

### 4Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。  
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。  
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice  
I II→省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。  
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ  
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

## 分散型コミュニティへの挑戦 ラウンドテーブルの広がり と 深化



2001年3月、約20名の実践者や研究者が集まり、「教師の実践的力量形成をめざして」というテーマのもとで互いの教育実践と教育実践研究を交流し合う研究会が催された。ここで放たれた熱き議論が「実践研究福井ラウンドテーブル」の産声である。それから14年間もの間、「実践研究福井ラウンドテーブル」は福井県内外と国内外のコミュニティとの往還を絶え間なく積み重ねながら、21世紀の教育を支援するための実践コミュニティを真摯に耕し続けてきた。このためめめ挑戦と努力の成果として、会を重ねるごとに「実践研究福井ラウンドテーブル」への参会者の増加が挙げられるとともに、参会者による実践報告の内容や質の多様化が挙げられる。「実践研究福井ラウンドテーブル」の創世記には少数の実践者の報告のみだったが、現在では研究者も自らの「実践」を報告し、さらに地域コミュニティの人々も自らの取組とその実践的意味を探究するために実践報告を行うようになった。この間、国際的な教育研究の前進を足がかりとしながら、教育の質保証と学びの転換を目指す多種多様な教育改革の施策や取組がなされてきた。その全ては、21世紀の知識社会に生きる子どもたちの幸せを保証するための挑戦であり、子どもたちの成長を支える全ての教育関係者の実践を支えるための挑戦である。「実践研究福井ラウンドテーブル」はこれらの挑戦を促し支えるための省察的機構としての実践コミュニティである。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの文字通り「実践の省察」を促し支えることをビジョンとする。このビジョンを基盤とした「実践研究福井ラウンドテーブル」には、日本全国や世界各地から多数の実践者や研究者が集まる。当然、彼ら／彼女らは「実践研究福井ラウンドテーブル」とは異なるコミュニティ、あるいは複数のコミュニティに属しており、それぞれのコミュニティ内でイノベーションを生み出す実践に挑戦している。つまり、「実践研究福井ラウンドテーブル」はローカル・コミュニティが集合する大きな、コミュニティの「坩堝（るつぼ）」なのである。もしも、このコミュニティの中で数多あるローカル・コミュニティが有機的に結びつき、そこ

でコミュニティ間の相互作用が加速化すると何が起きるのだろうか。それはおそらく新たな「知」の創発であり、新たな「かかわり」の生成であろう。これら新たな「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、現代社会を取り巻く困難や格差を突破するためのいくつかの「解（ソリューション）」が生み出される可能性が高まる。ただし、このダイナミクスを大きくし、このダイナミクスの質を深化させるためには「戦略」が必要になる。ただ指をくわえて待っているだけではダイナミクスやイノベーションは起こらないのである。

福井大学教職大学院はこれまでの「実践研究福井ラウンドテーブル」で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携し、「分散型コミュニティ」の設計に着手し始めた。日本全国そして世界各地にあるコミュニティの相互作用と化学反応を生み出すためには、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことが可能な「分散型コミュニティ」を設計することが肝要である。複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そこで互いの課題や問題を同定し、それらの解決策を考案し、共有可能な「知」を蓄積することが可能になる。「分散型コミュニティ」への挑戦とはつまり、「グローバル・コミュニティ」を築くための挑戦なのである。

2014年度には福井大学教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島で共有された理念とビジョンに基づく「ラウンドテーブル」が開かれた。この「ラウンドテーブル」の広がり と 各地で放たれた息吹は、日本の教育実践を支える新たな「省察的機構としての実践コミュニティ」の産声である。そしてこの実践コミュニティの足音はすでに様々な地域で共振している。この実践コミュニティは、おそらく日本の教育界ではじめて戦略的に組織化された「分散型コミュニティ」であり、今後数年あるいは十数年で「グローバル・コミュニティ」へと深化・進化することだろう。

(木村 優『2014年度 教師教育改革コラボレーション報告書 ラウンドテーブルの広がり と 深化』2015.3.31)

## 実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2016.6

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンド・テーブル 教師の実践的力量形成をめざして  
木岡一明・寺岡英男（この回は教師教育をめぐる20人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった）
- 2001.11.10-11 実践研究：福井ラウンドテーブル 省察的实践を支える協働（第1回）  
For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第1回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。（参加者20数名）京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第2回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志  
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る
- 2002.7.13-14 実践研究：福井ラウンドテーブル（省察的实践を生み出す 学び合う組織を編む）（第3回）
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル（第4回）  
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究：福井ラウンドテーブル（第5回）
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル（第6回） 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ：実践研究福井ラウンドテーブル2004（第7回）  
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる（於熱海～2009）  
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる（於早稲田大学）～現在に至る
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2005（第8回 参加者100名超）  
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル2005（第9回）
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2006 フェニックス・プラザ（第10回）  
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル2006（第11回）三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫  
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2007（第12回）渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹  
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル2007（第13回）藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男

- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008 (第 14 回) 横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル 2008 (第 15 回) 人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009 (第 16 回) 稲垣忠彦
- 2009.6.27-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2009 (第 17 回) 5 つの領域：専門職として学び合うコミュニティ  
(分野ごとのセッション始まる)
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010 (第 18 回参加者 300 名前後) 鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル 2010 (第 19 回) : 学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 20 回 参加者 300 名を超える) 門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 21 回) 松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
- 2012.3.3-4 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions (第 22 回) (名称を変更する)
- 2012.6.23-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions (第 23 回) 参加者 450 名を越える  
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions (第 24 回) 教師教育改革コラボレーションとの共催
- 2013.6.29-30 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions (第 25 回)
- 11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013 winter sessions (明治大学)
- 2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム (宇都宮大学) 1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 2014.3.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第 26 回) 参加者 550 名を超える
- 2014.6.21-22 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions (第 27 回)
- 11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム , 3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions (第 28 回) 参加者 700 名を超える
- 2015.6.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions (第 29 回)
- 11.21 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム, 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学, 12.6 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 12.19 教育実践福島ラウンドテーブル, 2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム ,
- 2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2016.2.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions (第 30 回) 参加者 800 名を超える  
生徒ポスターセッションを開催

# Archive - アーカイブ -

ラウンドテーブル 2009 Spring Sessions と 2016 Spring Sessions に参加していただいた方の報告を、Newsletter No. 11 (09.03.31) と No. 84 (16.05.14) からご紹介いたします。

## Newsletter No.11 (09.03.31) より

### 教師が学び合う学校をつくる

信濃教育会教育研究所長／東京大学名誉教授 稲垣 忠彦

「学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2009」の初日に「専門職として学び合うコミュニティー日本の教師教育改革のための福井会議2009ー」が開かれ、シンポジウムが行われました。シンポジウムでは稲垣先生のお話があり、ここではその講演内容の概略をお伝えします。(松木健一)

現職教育を目的としております長野県信濃教育会教育研究所から参りました。教職大学院で現職教育に取り組まれているみなさんと交流を期待して、参加させていただきました。私は1958年大学院に進学いたしましたから、ちょうど半世紀間、実践者としての教師から学び、共に歩んでまいりました。この8年間は、信濃教育会教育研究所で現職の先生方と共に実践を語り合ってきました。本日は実践を出し合う会ですので、研究所での実践を話題に取り上げたいと思います。まず信濃教育会とは、明治19年にできた教師の自主的な職能団体で123年になります。各県にもあったのですが戦後無くなってしまいました。研究所は昭和22年にできました。毎年8名の現職教員が研究員として派遣されてまいります。カリキュラムは、1年目が研究所をベースに、所員と8人が一緒になって研究しております。2年目は学校をベースに、勤務する学校にしながら毎月1回研究所にきて研究会をするという形になります。3年目は県内の4箇所事例発表会をして、それから皆でそこでまた議論をするという形態をとっております。ここで大切にしていることは、第1

に、振り返り、リフレクションとライフコースで、第2が事例研究ケースメソッドに基づく学び合いです。

研究員には4月から実践記録等をもとに、非常に丁寧に自分の実践の歩みを振り返ってもらいます。自己紹介がライフコースになるわけです。実は、教師という仕事は、これが非常に重要じゃないかと思えます。と申しますのは、学校は20歳代から50歳代のそれぞれ違った時期に生まれた人たちが、一緒に仕事をする場なわけです。一緒に子どもを見ながら、あるいは親と繋がりながら実践をする。そうなるとお互いのライフコースを通して理解しあう重層的な経験というものが、教育にとっての大きな財産になるわけです。また、ライフコース研究というのは過去を辿って行くだけではなく、将来に向けて行く。一人一人が過去を振り返ることによって未来に進む、明日を創っていく研究ではないかと強く思っています。研究員は1年次の後半になると、学校や保育所へ出かけます。そこで観たこと、撮ったビデオを皆で検討するというをやっております。この振り返りの中で、どういう資料や記録が大切かということが分かるようになってまいります。2年次では、各学校に戻って実践を積み上げ、実践の記録を残します。そして、1ヶ月に一度研究所に集まって、実践の振り返りを一人につき一時間半ぐらいかけおこないます。実践報告を基にした事例研究、カンファレンスです。研究員の先生方から見ると、自

身の実践の振り返りを通して、次の1ヶ月の実践が生まれてくるということになります。こういうプロセスを通して一人ひとりの先生が変化していくこと、それがプロフェッショナル、専門家としての成長だと考えるわけです。3年目には北信中信東信南信という4箇所ですれ発表会を行います。大体700人くらいの先生が40人くらいのグループに分かれて討論をし、それぞれの事例をつき合わせていきます。こういう事例研究の方法が、現場を繋ぐ非常に重要な手がかりだと期待しています。また、参加者が事例の検討を通して皆で学び合う、これが長野県の教育研究のスタイルの1つでしょう。このよう

な事例の検討会を経験した人が、各学校に戻り芽を育てることを期待して、終わりといいたしたいと思います。

稲垣氏のお話は、信濃教育会教育研究所の取組みを中心に、教師の成長にとってリフレクション、ライフコース、カンファレンスがいかに重要性かを、ご自身のライフコースをたどりながら重層的に展開されました。その全容を載せることができず残念です。また、お話を伺うにつけ、再度、福井大学の教職大学院の源流がここにあることを自覚するものです。

## 同一グループにおける経験を複数の参加者が語る

第29グループの話し合いを、参加者の中の4人の方に報告していただいた。

長野県伊那市立伊那小学校教諭 森田 正之

初めて参加させていただきました。勉強不足でなんの予備知識もないままに出かけていきましたので、教職員大学という存在も先進的な改革をされている至民中学校という存在も、このときに初めて知りました。至民中学校の大橋巖先生の報告では、学校現場と大学の研究とが密接につながり、地域ともつながり、協力しあって学校づくりを進めていかれている様子がかがいがい、とても興味深くお聞きすることができました。「通いたい、通わせたい、勤めたい学校」という実にシンプルで、しかし本質的な学校像を目指して、さまざまな分野の人たちと協力し次々に手をうたれていく組織としての実行力とその推進を担われている大橋先生をはじめとした至民中学校の先生方の実践力

には、大きな驚きを感じ敬服いたしました。私の拙い実践報告にも真剣に耳を傾けていただけたこと、ありがたく思いました。私のテーブルには現場の先生も大学の先生もいらっしゃいました。どの先生からも実践の内容をつつくようなことではなく、この実践を通して教師としての私自身の育ちや学びをどう感じているのかとか、そうして得たものをこれからどう活かしていくのかとか、これまでほとんど人から問われることも自分自身で問うこともなかったことを問われ、なごやかで楽しいテーブルの雰囲気の中ではありましたが、学校現場の実践者として大切にしなければいけないことを気づかせていただいたように感じ、とても意義ある時間となりました。

お茶の水女子大学大学院人間発達科学専攻2年 吉見 江利

2日目、小グループに分かれてのラウンドテーブルは、地域や専門は異なるが自分以外は全て現職の小中学校の教諭及び大学教員の方々の中で行われた。1人目の長野県伊那小1年担任の森田先生は伝統ある総合学習の実践の様子を話された。都会の

小学校1年生では「無理」「危険」と回避するような小屋作りやヤギの世話や散歩などを子どもたちが率先して行う姿に驚いた。またヤギを中心に「仲間」や「社会のしくみ」「豊かな感性」が自然にお互いの中から育っていると感じた。発表は、記録が

書かれた模造紙を床に広げての説明で、臨場感がありとてもわかりやすかった。ただ部屋を移ったために、質問が固定式のテーブルで行われ、全員が一同に向き合えず、発表者と質問者のやりとりを全員で共有しにくかったことが心残りであった。

午後、2人目は福井大学教職大学院の拠点校である至民中学校で実践と研究をされている大橋先生の発表で、移転開校によりクラスターという異学年で構成された教科別教室の形や1時限を70分にするという画期的な方法により学校の授業を根本から変革していた。それは従来の学校のイメージを覆えず、目からウロコの話であった。デザイン性の高い校舎の中で生徒も先生も生き活きと学校生活を送り、地域の人もガイドボランティアで「私たちの学校」と誇りを持って積極的に関わっている様子が目に浮かんだ。3人目は福井大学教職大学院1年目の福井県内養護学校教諭の山崎先生の発表であ

った。専門的な実践の中、生徒同士の好ましい関係が広がりクラス全体のかかわりに変容があったということが生き活きと語られた。実践の中で気づいたことを同僚の先生方と省察をしながら深めており、そこには同僚の先生方は経験年数では上であっても「～してはいけない」「～すればよい」「～すべき」のような一方的な助言や指導はない。共に実践を共感し、創造する仲間としての存在であることがとても大きいように感じた。

私自身、地域で学校支援ボランティア活動に関わっており、学校や先生との壁に悩んでいたが、先生方の苦労を含めた実践をお聞きし「学校もこんなに変わる」「こんなに熱意をもった素敵なお先生方がいる」と大変勇気づけられた。教員ではなくても明日から自分もまた、地域と学校のために頑張ろうという気持ちになれたことがとても嬉しかった。

福井大学教職大学院教職専門性開発コース1年/県立嶺北養護学校講師 山崎 祥子

私がラウンドテーブルに参加したのは、今回で3回目です。毎回規模が大きくなっているように感じます。このように大規模なラウンドテーブルで、各方面の経験豊かな方々が参加されている中で、今回私が報告をさせていただくことに始めは抵抗を感じました。しかしこれをチャンスと思い、勉強させていただこうと決意できたのも、これまでのラウンドテーブルの経験から、小規模グループでの話し合いがいつも充実しており、自分にとって新たな発見の連続であることを知っていたからではないかと思えます。

まず報告1の伊那小学校の実践について考えたことを記したいと思えます。これまで伊那小学校の実践を読んだり、講義形式でお話を聞いたりしたことはありましたが、今回、このように少人数の場でじっくりと聞けたことをまず嬉しく思いました。きれいな面ばかりでないリアルな実践を聞くことができ、身近に感

じられました。印象に残った言葉は「小学校1年生だからこんなもんだろう、という自分の中の枠を取り払い、子どものいろんな力を引き出してあげたい」という言葉でした。何気ない一言で、そう思っている先生も多いことと思いますが、そのときまきにお聞きしていた実践の中でその思いが生き生きと感じられ、それをダイナミックに実践されている先生の言葉であったからこそ、とても迫力のある言葉に感じました。いつも私の頭にもあることでしたが、できたりできなかったり…。学校種を越えて改めて子どもの可能性を信じる大切さを教えていただきました。

そして私の実践の報告。つたない報告で申し訳ない気分になりましたが、それでも温かくご意見をくださり、とても勉強になりました。専門が似ている先生から、全く違う先生までいらっしや、それぞれのお立場から思ったことを話してくださいました。時には私

が答えきれない部分を補っていただくこともあり、その点でもとても勉強になりました。この実践を通して自分のどこがどう変わったか、自分と同僚との関係はどのようなものか、など、今のままでは不十分で、もっと突き詰めて考えるべき課題をいただきました。

## 展開を支える営みを聞きとるとは

実践記録を元に実践の歩みをじっくり語り、それを聴くことが、本ラウンドテーブルでは目指すことでした。発表者は3人。午前中の報告1は、長野県の伊奈小学校の森田正之先生、報告2は、福井大学教職大学院の現職教員で至民中学校の大橋巖先生、福井大学教職大学院の山崎祥子さんで、特別支援学校での実践事例報告でした。実践をより広く伝え合い、じっくり展開を聞きとり、学び合う場として、前提を共有していない人と、少人数で親密に語るの構造から作られる意味と、その意義は堪能できたように思います。いろいろ考えさせられ、あれこれせわしなく頭が動きました。それは面白い体験でした。それが「その後の実践への問いの深まり」を生み出すようにも感じました。ただ一つだけ気になったことがあります。それは、1時間30分の時間の持ち方です。じっくり語り、それを聴くとは、1時間30分のセッションで、1時間近くを報告者の報告を聞くことなのだろうかとの印象を抱きました。私自身はカウンセリングを専門としています。クライアントに省察させる中で変化を与えるのが仕事です。そのときに傾聴を強調します普段から、そこでの傾聴は、「ただ、ふんふんと聞くのは、聞くのではない」と考えています。それでは、互いに変化は起きないし、本当に聴いてもらった感覚は、話し手に起きないからです。

これまでの実践を振り返りまとめるとき、また、これからの実践をまとめていくときに、改めてしっかりと考えていきたいと思いました。今回のラウンドテーブルを通して感じたことがまた、一つのステップになります。本当にありがとうございました。

東京学芸大学教職大学院院長 小林 正幸

事象と出会ったときに感じた違和感や感動などを、聴き手が踏み込んで確認し、表明し、的確に話せること、そこで、その場での話を深化させることが、聴くことであり、他者の学びを学ぶ者としての役割なのではないかと思います。あくまでも報告者の報告から離れてはなりません、報告を受けて、語り合いことが、残されてしまったように思われました。対話のように報告をすること、そこでより深めたいことが、報告者の中で、焦点化されて端的に示さる必要もあるのでしょうか。参加者は、そこで生じる疑問や違和感をできるだけ端的に語れるようにする必要もあるように思いました。対話のためのラウンドテーブルです。報告者報告は時間の半分、できれば、全体時間の3分1で一番大事なところ、どうしてもそれを語るために必要なことを語っていただき、後半の半分あるいは3分の2の時間は、それを深め、対話することにしていただきたいと感じました。じっくり話すのを大事にするのでしょうか。じっくり聞くことを大事にするのでしょうか。福井大学のラウンドテーブルの構造、趣旨に賛同し、意義を理解し、それを堪能し、内容は素晴らしかったと思っています。

ただ一点だけ「もったいないな」と感じたことを書かせていただきました。失礼をお許しくださいませ。

## 「夢 語ろう会」を通して感じたこと学んだこと

前回のラウンドテーブルでは、安居中学校の方々と交流会をしました。その時は、じっくりと安居中の教科ごとに教室を移動する形を知ることができました。今回のラウンドテーブルでは、たくさんの学校の文化や取り組みを知ることができました。また、ポスターセッションや夢語ろう会を通して、学校への愛や、文化を繋げよう、新しく文化を創っていこうという熱い想いを感じることができました。それと同時に、附中の良さを再実感することができました。私たちは、来期

福井大学教育地域科学部附属中学校 2年 辻 夢果  
から3年生として附中の文化を受け継ぎ、考え、発信し、繋げていく立場となります。先輩から代々受け継がれた附中の文化をさらに良いものにし、発信していくために他の学校の文化を知り、良いところは真似しながら学校全体で考えていかなければいけないなと思いました。私は音楽委員として、これからも附中の音楽文化に誇りを持ち、学校中を巻き込みながら、文化の継承に携わっていきたいと思います。

## どんな人間を育てるか、考えよう 小・中・高の協働について考えたこと

今回、福井ラウンドテーブルに参加するのは2回目である。昨年度の春のラウンドに来て以来、1年ぶりの参加となった。毎回、来て思うことは「一緒に頑張っている仲間が日本全国にいる」ということである。日本の子どもたちのために、日々研究をしている仲間がいるということを感じて、心強く感じる。そして、「負けてなるものか」という気持ちも強くなる。今年の春のラウンドテーブルでも、もっと子どもたちに力をつけていきたい、日本をよい国にしていこうためには何が必要なのかということを考えるよい機会となった。

Session IIでは、中高一貫校の和歌山県立桐蔭中・高校の岸田先生、長崎大附属中の鶴田先生からの発表があった。岸田先生は中学と高校の連携を、鶴田先生は小学校と中学校の連携について、とても参考になる発表があった。中学と高校の連携では、キャリア教育を軸に、「これから先の人生をどのように生

板橋区立赤塚第二中学校 教諭 森田 直実  
き抜いていくのか」という自己で進路を切り拓くために必要な教育をしているとのことで、義務教育を卒業し、新たなスタートを切る中学・高校という時期にはふさわしいものだと感じた。小学校と中学校の連携では、小学校との連携を始める難しさをあらためて感じた。小学校と中学校と、授業の1単位時間が違うことや、放課後の時間の生活が違うために、研究の時間がもちにくい。さらに、中学校では進路などがあり、小学校とは行事の流れがちがうことなど、たくさんの困難がある。しかし、長崎附属中はその困難を克服し、研究を進めることができている。この実践からは学ばなければならないと感じた。赤塚第二中学校は、同じ敷地内に小学校が設置されている。中学校からも小学生が遊ぶところや体育の授業をする様子が見られる。近くにあるのに、小学校のことを知っているか、小学校の先生のことを知っているかと問われても、おそらく自分は適切なこと

しか答えられないだろう。小学校と中学校は違うものだという意識が、どこか私の中にあるからだと感じる。困難を少しずつ、無理なく解消し、小学校との連携を深めていくことが必要だと痛感した。

Session IIIでは、小グループでの実践を語り合うことができた。私のいたグループでは地域は違えども、小学校、中学校、高校、大学と4つの校種の教員がおり、それぞれの立場からの連携について語り合い、考えることができた。校種ごとに抱える問題は異な

っている。その抱える問題が、校種の連携をスムーズに行えない一つの原因ではないかと考えた。また、質問にも出てきた「どのような人間に育てたいかというグランドデザイン」ということも話題に上った。どのような人間を育てるか明確な目標を作ることが、これからの教育には必要なことになるのではないかと感じた。教科も含め、どのような人間を育てていくか、現場から考えていきたい。

## 学校を学び合う共同体に

教師の学びは、まさに「実践し、省察する」ことによってなされる。ZoneBは、「育成指標は教員研修を変えられるのか」というサブテーマが設定されていた。教員の育成には、「育成指標」を目標設定に活用し、実践したことをラウンドテーブルのような、「コミュニティ」の中での協議によって省察し、学び合うことが必要である。教員研修も目標を設定し、実践し、省察し、次の目標を設定するといった学びのサイクルの中で営まれることが大切である。ポスターセッションでは、横浜市の教員研修について、発表させていただいた。「教員のキャリアステージに応じた人材育成指標」に基づく研修では、目標を設定し「実践し、省察する」ことを基本にしている。組織内の役割でキャリアステージを分けていること、校外研修と校内研修を連動させ、OJTが進むように仕掛けていること、大学との連携・協働などをお伝えした。発表させていただくことによって、研修の方針や考え方を見直し、整理することができた。また、セッションによって取り組んでいることの価値や課題に気付くことにもなり、感謝している。

管理職には、地域、大学、専門家などの様々な力を借りて、「チーム学校」としてマネジメントを進めていくことが求められている。このラウンドテーブ

横浜市教育委員会事務局 安富 江理ルには、様々な立場の方が集まり、セッションを行っている。その中で、発表者の実践が価値づけられている。さらに、協議に参加している誰もが、それぞれの立場や視点から発表者の実践を聞くことによって、自分の経験を振り返る機会ともなっている。子供たちのポスターセッションは、どの姿も素晴らしかった。中でも、自分の学校に誇りをもち、校舎・環境を十分に生かして学んでいることを伝える中学生の姿に感動した。オープンスペースの学校は、教員が異動してしまうとそのよさが伝わらなくなってしまうことがある。しかし、この中学校は、校舎に対するマインドが生徒間で引き継がれているので、教職員と協働して学びに取り組むことができている。さらに、研究テーマも共有されているので、学び合い・高め合いなど授業で大切にしたいことや省察の視点が明確になっている。子供も主体者として、共に学校づくりをしていることを学ばせていただいた。

様々な立場の方に学校経営に参画していただき、学校が学び合う共同体となることの意味や価値を、改めて感じた貴重な2日間であった。

## ともに学び続ける

中国帰国者支援・交流センター 金井 淑子

福井ラウンドテーブルに初めて参加し、学生や若い世代の具体的な実践活動を知るよい機会となりました。中でも特に印象深かった「探求ネットワーク」について感想を述べます。

福井大学では、教育の一環として学生を県内の多様な場に派遣し、様々な活動を通して、学生を様々な人々と向き合わせる「探求ネットワーク」と呼ぶ実践教育を行っています。そこでは活動の企画、運営その他の活動を、学生の自主判断に任せて進めています。

探究ネットワーク活動の一つで附属特別支援学校で障害児を対象に行われている「ふれあいフレンドクラブ」の「ふれあいタイム」の活動では、学生のサポートの下掃除屋、駅員、解体屋、ダンサー、画家などの仕事を児童にさせています。集団が苦手な児童をも考慮して活動は個別対応で行われていて、「ふれあいタイム」への不参加も認めています。仕事によって得た報酬を仕事をした児童に渡し、用途を児童の希望に任せていることが参加児童のモチベーションの向上に寄与していると思いました。学生たちは児童の自主性尊重を第一として様々な苦労を重ねながら児童とのコミュニケーションに工夫をこらし、サポートを行っていることに感銘を受けました。

同じ探求ネットワークの「かみすき（紙漉き）」は、児童が紙を実際に漉き、できあがった紙で様々なものを作る活動で、作るものは児童の個性や自主性に任せて、参加児童の希望や考えに応じて変えていくように

しています。主に小学4～6年生を対象としているが、実際の参加者は小学1年から高校1年生まで広がっているそうです。参加者の弟妹や以前参加した児童が再度参加するリピーターがいるためです。リピーターが自然と新規参加者を指導するなど、活動がよい方向に循環している様子がうかがわれました。参加児童の自主性を尊重して活動が進められていて、児童にとって活動自体が面白いことが、その理由のようです。スタッフの考えに固執せず、児童のアイデアを取り入れ、季節によって活動内容を変えたり班単位の作業を加えたりするなど、活動の目標設定などを試行錯誤しながら進めている。いずれの活動も活動内容を児童の自主性を重視して進めていることが成功の要点と思いました。

学ぶ人をリスペクトし、自主性を尊重することが最も重要であることを、私は長年にわたる地域の日本語教室におけるボランティア活動を通して実感してきました。Zone C で報告されたどの活動も、活動の対象となる人の自主性を尊重し、上から目線ではなく相手をリスペクトすることを大前提に進められていること、また、首都圏では退職後のシニア世代や子育て終了後の人たちによるボランティア活動が多い中、若い人たちによる様々な活動の状況を知ることができ、ボランティア活動の広がり、前進を感じることができて勇気づけられ、私にとって有意義な機会でした。

## 「つながる、広がる、続ける」

国高小学校PTA 坂下 淳子

今回初めて、実践研究福井ラウンドテーブルに参加させていただきました。シンポジウムでは、市立札幌大通高等学校の平野先生が定時制高校と地域との関わりについて実践している現状を、安居の里を

守る会の重森さんが体験学習を中心とした子どもの地域活動について発表されました。高等学校と小学校、都市部と地方、教員と地域住民という全く違う立場からのお話でしたが、共通することは、子ども

たちのために熱心に活動されているということと、その活動をどう継続していくかが難しく、学校と地域との連携が大切だということが分かりました。

グループセッションでは、学校、公民館、行政関係者やPTA、学生など様々な立場の参加者80人ほどが14のグループに分かれて、実践報告を聞きあい、感想や意見を述べあいました。私の参加したグループでは、公民館の方が、半年ほど前から始めた「公民館クラブ」活動の様子や苦労した点について報告されました。小学校のクラブ活動に地域住民の方を講師に招き、得意分野を子どもたちに教えていただくという企画は、子ども・学校・公民館・地域が一つにつながり、とても魅力的だと思いました。見守り隊や読み聞かせの活動も広がっていますが、地域の方が先生として学校で子どもたちと交流することで、地域と学校の距離が近づき、また公民館に関わることで子どもたちが公民館に遊びに来るようになったそうです。学校と地域とのコーディネートや活動を継続させることの難しさなどについてグループ内からも意見が出され、とても参考になりました。また、福井大学教育地域科学部の学生による「もぐもぐブロック活動」報告では、小学校3年生から高校2年生までの23人と料理を通して学びを展開している活動が紹介されました。地域も学年も経験も違う子どもたちの仲をいかに深めるか、一人一人

の役割を意識して調理できるか等を目標に活動してきました。子どもたちが初期のころと比べ大きく成長した姿や楽しそうな笑顔を見ることができ、スタッフも共に学び、成長できたことを誇りに思っているそうです。グループからは、地元の伝統料理を伝承する活動をしている地域があるので、公民館等を通じて紹介してもらいたいという意見がありました。今回のグループセッションが、子どもたちと学校をつなぐを地域へと広げるきっかけになることを期待したいです。

国高小学校PTAでは、本年度「国高っ子の夏祭り」を初めて開催しました。PTAを中心としたゲームコーナー、自治振興会の昔遊びコーナー、スポーツ少年団の体験コーナー、仁愛大学のよさこい、地元企業による働く車コーナーと飲食コーナー、巨大スクリーンでの映画鑑賞に1,000人を超える人たちが集まりました。祭りというイベントを通して、共感と協力の輪が広がり、学校と地域がより深くつながることができました。大切なのは、このつながりを継続することだと思います。シンポジストの方も活動を5年は続けなければ、成果は出ないと話されていました。子どもたちの成長を願ってつながったこの活動をこれからも広げていきたいと、思いを新たにしました。

## つながり，ひろがり，そして…

福井市至民中学校 教諭 竹林 史恵

### きっかけ

本校の授業研究について話をしないか、と打診されたのが晩秋の頃。福井大学教職大学院の拠点校で研究主任を務めている以上「NO」はない。「私個人の発表じゃない。本校の良さ、他にはない特徴を全国に伝える絶好のチャンス！」とプラスに捉えて臨むことにした。数年分の研究紀要や実践録を引っ

張り出し、今年度の実践録の原稿や参観記録をじっくりと読み返し、合計数百ページにも及ぶ冊子の数々を前に、改めて本校の「書く文化」を感じた。むろん書くことが最終目的ではない。授業力をつける、自己の力量をアップする、そのための一手段である。しかし、授業を参観して、1年間を振り返って、その都度深い考察を繰り返した文章からは書き

手の思いがピンピン伝わってくる。本校内外の執筆者、延べ数百名の思いが詰まっている冊子を様々な形で遺し続けている本校の研究の意義を、この機会に他校の、他県の様々な立場の方に知っていただけたら、と改めて思った。

何度も手直した原稿や不慣れなプレゼンは研究部メンバーのおかげでどうやら形になった。発表前、多くの方から温かい言葉を頂いた。当日の出来は自分ではわかるはずもないが、発表直後、会場で見守ってくれていた仲間達のとびきりの笑顔を見て、「伝わったんだな」とホッとしたことはよく覚えている。京都から

今回初めて、研究会やゼミで知り合った京都在住の先生方にも声を掛けた。私立高校で研究主任として活躍中のY先生は「今の悩みを話すつもりで…」と言いながら、長年の経験を活かした丁寧な取組を発表して下さった。「こんなに実のある2日間は初めて！」と満足げに帰京された翌朝、真っ先に校長室に直行し、研究部としてやりたいことを熱く語られたそうである。Y先生の積極性に感心するとともに、県や校種の垣根を越えて初対面同士が率直に語り合えるラウンドテーブルの醍醐味を、初参加の先生にも感じてもらったことが非常に嬉しかった。余談になるが、福井自慢の料理を味わいつつ教育談義に花を咲かせた夜の会も忘れがたい思い出である。

### 涙の理由

多くの気付きや感動をもらった中で、最も「心が揺さぶられた体験」は授業研究フォーラムの最後、富山大学松本教授のお話だった。富山県堀川小、福井大学附属中の素晴らしい発表の後である。「(前略)私も堀川小へ転勤になった1年目、とても忙しくて大変だった。でも1年勤務してわかったこと、それは堀川の先生達は『教科』を教えているんじゃない、『教科』を手段にして『教育』をしているん

だと。だから楽しい。堀川や附属の先生達も大変なのに、発表が楽しそうだったでしょ？でも一人ではできない。みんなでだからできる。(中略)点数を上げることだけにこだわるのではなく、もっと奥深い、子供の心に根付くことをやらせてもらえる教師に堀川がしてくれた。そういう教師になれてよかった、と今思っている…」この話を聴きながら不覚にも涙が。うわ、どうしよう、こんな場所で。でも止まらなかった。『学校の先生になりたい』と思っていた子供時代からの気持ちを、ズバリ表現して下さった、まさにそんな言葉だったからである。心に響くあったかいお言葉…きっと忘れない。

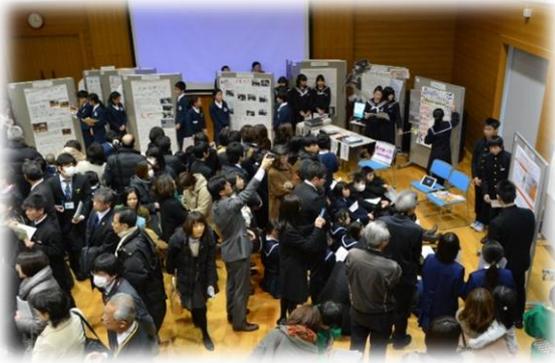
### 体験から

院生時代から数回参加しているラウンドテーブルだが、今回ほど印象深い、充実した経験は初めてである。それは、発表をきっかけに課題に対して自ら主体的に考え、仲間の力を借りて何度も練り直し、さらに発表に対して様々な評価を頂いたおかげである。また、立場の違う方々との交流を通して、自分(達)の実践を新たな視点、違った角度で見つめ直し、大切な点を再確認できたからである。

思えば、これは生徒にとっての「授業」と同じではなかろうか。主体的、意欲、評価など日頃から授業づくりの時に意識しているキーワードは、今回の自分の体験の中でも、やはりキーとなる部分であった。その体験を仲間と共有できれば、その重みや意義はさらに何倍、何十倍にもなる。今回は本校の生徒、教員、サポート至民さんなど、本校に関わる20名以上が参加させていただいた。参加前、会場で、参加後、それぞれに声を掛け合い、感想を伝え合い、ねぎらい合ったことの一つ一つが大切な財産である。そして、今回参加して得た、それぞれの手応え(=宝)を今後に活かし、新たな至民中学校の可能性を探ることが、次への成長につながるものと確信している。

※ご所属は当時のものです

# Photo album - 写真集 -



Students' Poster Session



Session I (Knowledge Fair)



Session II (Symposiums)



Session III (Forums)



Session IV (Cross Sessions)

# Bunkyo

【文京キャンパス】  
Campus

教育系  
1号館

共用講義棟



懇親会会場  
カフェテリア味菜

## 懇親会にも「来ね！」

とき 25日(土) 18:00~19:30

ところ カフェテリア味菜

会費 2000円

事前申し込みがなくても受け付けます。